人間科学部　教授　川上周三

本書は、近代資本主義がヨーロッパにのみ生起したのはなぜかという問題意識から出発する。マックス・ヴェーバーは、その重要な一要因を宗教信仰と職業倫理との親和関係に求め、宗教運動が物質文化の発展に及ぼす影響の仕方およびその方向を考察しようとする。

まず彼は、資本主義の精神を「歴史的個性」として具体的発生的関係において把握しようとし、その典型としてベンジャミン・フランクリンの職業倫理を考える。

次に、それと親和関係をもつ宗教信仰として、カルヴィニズムを索出する。さらにその信仰と宗教生活の実践のうちから生み出されて、個々人の生活態度に方向と基礎を与えた＜心理的起動力＞を探索しようとする。その結果、カルヴィニズムの教義である＜二重預定説＞が生み出した合理的生活を志向する方法的組織的な「世俗内的禁欲」をみいだす。次に、これが営利活動に及ぼす影響を考察する。この禁欲は、労働を天職とし救済確証の手段とする心理的起動力を創造したが、同時に企業家の営利をも天職と考えることによって、労働意欲の搾取を合法化するに至ったと結論づけている。

本書は、プロテスタント諸派、とりわけカルヴィニズムが人間の自律形成に及ぼした精神史的意義とともに、それと密接に関連して、プロテスタント宗教信仰が生み出した「世俗内的禁欲」倫理の精神を持つ新しい人間類型が、近代化に対して果たした重要な役割を考えさせてくれる。このことは、アジアにおける近代化や、近代的側面と封建的側面の二側面を抱えながら国家形成をしたわが国の近代化の問題点を考えていくうえで、一つの指標として役立つと思われる。

プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神 / マックス・ヴェーバー著 ; 大塚久雄訳
岩波書店 , 1989.1（岩波文庫）

本　　館 X/080/I95W/Web
生田分館 X/080/I95W/Web
神田分館 X/080/I95W/Web